

# ある解釈学的体験

—— ウィスコンシン・セミナー覚書 ——

安 富 信 哉

半年間のウィスコンシン滞在を終えて京都に戻ったのは昨年七月中旬であった。京都特有のじっとりとした肌になどわりつく暑さ、ひしめくような市中の家並、こもり茂る竹林の風景、などが、もとの生活現場に帰ってきたことを私に実感させた。が、もう足は京都の地を踏んでいるのに、頭はまだウィスコンシンにいますという感じがしばらく抜けなかった。あれからさらに九ヶ月。昨今では、日常生活の慌しさのなかに、ウィスコンシンの日々も記憶の彼方へと遠のいていく感じだ。

宮下晴輝氏（仏教学科専任講師）と小生が本学から派遣され、出席したのは、<sup>〔註〕</sup>ウィスコンシン大学（州立）の仏教科のぐくつかのクラスである。すなわち「浄土論」および「三性論」の二つの講読のクラス、それに浄土教のジョイント・セミナーであった。とりわけ毎週金曜日、午後二時半より五時まで、Van Hise Hall 十二階の南アジア研究科の一室で開かれたこの浄土教の特別セミナー<sup>（注）</sup>に助言者として出席することは、今回の滞在の主要な目的であった。

今回のこのジョイント・セミナーを企画し、われわれの滞在

の万端をお世話下さったのは、仏教学科主任の清田実（Minoru Kyōta）教授である。米国生まれの先生は、戦後東大印哲に留学、一九六一年九月に、故リチャード・ロビンソン博士の構想のもとにウィスコンシン大学大学院に仏教学のコースが開設されるや、チャット字のアレックス・ウェイマン教授（現ロロンビア大教授）とともに、中国・日本仏教の講座を担当すべく本学料に就任、今日に至っている。

“*Mahayana Buddhist Meditation*” (1978), “*Shingon Buddhism*” (1978), “*Tantric Concept of Bodhicitta*” (1982), “*Gedatsuikai*” (1982) など多くの著書がある。先生は、このセミナーに向けて次のようなスケジュールを立てられた。

## I. Themes and Assumptions

1. Problematics: Origin and Development of the term “Pure Land”
  2. The Buddha of Pure Land and Bodhisattva Dharmakāra
  3. Vow: The Switch from karmic Transmigration to Transferring Merits
  4. *Nembutsu*: its Existential Meaning and Problematic
  5. The Meaning of Faith: Belief in the “Incomprehensible”
- ## II. Indian and Chinese Canonical Sources
1. *The Triple Sutra: Its Literary History*
  2. Vasubandhu's *Upadeśa: The Practice of Purification*

3. The Chinese Textual Development : The Three Streams of Pure Land Thought
4. Tran-luan's *Lun-chu* : *Jiviki* and *Taviti*
5. Shan-tao's *Kuan-ching-su* : The Salvation of the "Wicked"

### III. The Japanese Systematizations

1. The Historical Background
2. Honen and His Thought
3. Life of Shinran
4. Shinran's *Kyō-gyō-shin-shō* : Salvation through Absolute Faith
5. Shinran's Concept of Salvation : *Shōjōjin*

Epilogue : An Interpretation of Pure Land Thought from a Mahayana Perspective

このテーマにそって、私たちの担当が割り振りされた。しかし半年間のセミナーとは違って、途中の休みを入れると開講されたのは十三回しかなかった。これらのテーマを十三回で消化するのは不可能と予想されたが、予想はあたり、第三部の *The Japanese Systematizations* は二回しか残されていなかった。小稿では、しばらく素直なメモをたどりながら、セミナー風景の数コマを点描することにした。

〔註〕 本学とウィスコンシン大学仏教科との間には、数年前から学術

交流が進められてきた。今回のジョイント・セミナーも、その一環として行われた。なおウィスコンシン大学の仏教科の沿革については、両瀬渉氏が「アメリカの仏教研究の動向——ウィスコンシン大学の場合——」（『真宗』昭和58年9月号）と題して紹介されている。

セミナーの第一部は、*Themes and Assumptions* で、浄土阿弥陀仏、業、回向、念仏など浄土教の基礎概念が論じられた。一月二十五日 この日はイントロダクションで、われわれ二名の簡単な紹介のあと、講座内容のアウトラインとクラス日程について説明された。清田先生は、アメリカでは禪の研究は進んでいるし出版される本の数も多くが、日本で最も有力な浄土教についてはほとんど研究がなされておらず、その意味で今回のセミナーはアメリカの大学では最初の試みであり、意義も深いと強調した。

そのあとペーパーが配られ、十五分間の黙読のあと質疑応答に入った。ディスカッションの内容としては、(1)西洋の仏教学者(マックス・ミュラー、コンゼなど)における浄土教の認識の水準、(2)仏教学の方法論(文献学的方法、哲学的的方法など)の問題点、(3)真宗学の方法論の問題点、などがあつた。清田先生は、これらを概括した上で、浄土教の本質を大乘仏教の文脈のなかで把握することの必要性を述べた。私は、真宗学の成立の経緯や問題点について若干の補足説明をした。

二月一日 この日のコメンテーターは宮下氏であった。以後のセミナーは、清田先生が用意されたペーパーをもとに展開し

たが、当日は、そのなかの「浄土」の問題が中心テーマとなった。学生の質問は多岐にわたったが、比較思想的な観点からの質問、「浄仏国土」(Ksetraparisuddhi) はどのような原典的根拠をもつか、仏国土の思想は仏教本来の思想といえないのでは  
ないか、などの質問があった。

これに関連して、平川彰博士の学説に準拠する清田先生とそれに反論する宮下氏との間に意見の応酬があったが、それは、仏教学を専門としない私にとっても甚だ興味ぶかいものであった。清田先生の所見に対して、思わず宮下氏が「You are wrong!」と大喝し、クラスが一瞬シーンと静まり返ったこの日の光景は、今も忘れることができない。

毎回のセミナーの出席者は、学生十名、教員三名(宮下氏と私は faculty member の身分証が発行された)の構成であった。博士課程の学生あり、学部生あり、聴講生ありで、仏教の研究歴、問題関心も様々であったが、質問の内容や質にかかわらず、学生の発言が何のてらいもなくされるのは、いかにもアメリカ人らしいと思った。ただそこで危惧されたのは、議論が浄土三部経や浄土教の論疏に根ざして展開しないために、問題の焦点が絞られるより拡散するという傾向が生じることであった。質問と応答のなかで、当日の主題が忘れられてしまうという場面もあった。

アメリカで浄土教について学ぼうとする者にとつての第一の困難は、英語テキスト——それが原典であれ、解説書であれ——が不十分な点にある。研究歴の浅い人や中国・日本仏教を専攻

しない人にとつて、漢文や日本語の原典や専門書に直接あたるのは不可能に近い。その場合頼みの綱は、英語テキストということになる。日頃、語学(バリ語、梵語、チベット語、漢文、日本語などの)予習に追われるコース・ワークの学生たちにとつて、セミナーの準備は容易でなかったはずであるが、そのなかにあつて、彼らは、数少ない浄土教関係の英語文献を回わり読みしていた。

二月八日、十五日 八日以降からセミナーの形式が変わった。谷大の教員が、清田先生のペーパーの主題に沿って、それぞれプレゼンテーションを行い、そのあと先生の司会で学生と討論するという形式がとられた。

先生は、セミナーの基本的なリーダーシップをわれわれに委ねられたわけである。責任重大となった。八日、十五日の両日は、宮下氏が担当した。氏は、業と回向、菩薩思想と授記(Preciation)の意義、阿弥陀仏の概念など、およそ浄土教について研究しようとする者の基本的な確認事項について、東西の仏教学者の説を紹介しながら、ほぼ時間の全部を使って、水準の高いプレゼンテーションを行った。綿密に準備したノートを厳しい表情で読みあげる氏の横顔が想い出される。

このセミナーの質疑応答のとき、われわれにとつて最大の障害は英語であったが、清田先生は、われわれのためにモニター役を務められた。議論が噛み合わないときには、からんだ糸をほぐすように、問題点を整理していただいた。また学生側では、セミナー唯一の日本人、後根定鑿氏(大正大出身、在米九年)

の協力は忘れることができない。毎回セミナーが終了すると、学生たちがわれわれのプレゼンテーションをどの程度理解できているかコメントしてくれた。

二月二十二日 この日は回向というテーマであった。私の初めてのプレゼンテーションであった。私は、『The Outline of Ezo Concepts in Pure Land Buddhism』という二枚のレジメを用意した。そのレジメのなかで、私は、浄土教の経・論・疏のなかから、真宗学で回向を論ずる場合に必ず重視されるであろう数節をピック・アップして翻訳し、回向思想の歴史的展開について紹介してみようと考えた。その翻訳文がひとつの道筋となつて、親鸞の本願力回向の思想が明らかになるはずであった。

しかし学生には、私のプレゼンテーションはよく呑みこめなかったようであった。途中からいくつかの質問が出たが、いま覚えているのは、ジム・ステッドマン氏からのもので、①回向と主体の関係について。もし本願力回向が働らくならば、主体の責任の問題はどうなるのか。②回向と恩寵の問題について。キリスト教の恩寵思想と浄土教の回向思想にはどのような差異があるだろうか。——などの質問である。この問いは重要と思われたが、私は、ジムの、そして自分自身の納得のいくようなリスポンスは、残念ながらできなかった。

セミナーのあと、ジェミー・ハバート氏は、

「真宗の救済論を明らかにするには、心理学の回路、哲学の回路、いくつかの回路をとって発表してゆくことが必要

ではないだろうか。アメリカ人が持っている回路で話さないと、全く話が通じないのではないか」

と言い、ビル・ウォルドロン氏は、

「先生の英語は、クラスの人たちも大体は分かると思う。しかし浄土教については、こちらの学生は基礎知識がないのだから、日本の学生に話すのとは違ったやり方を取らねばならない。アメリカ的な教え方が必要ではないか」と述べた。要するに、ここはアメリカだ、日本ではない、ということである。眼の前に何か大きな壁が立ちはだかっているようであった。カルチャー・ショックとは、これであろう。

とにかくこれからこの調子でセミナーに臨むことは許されなかった。私は講義のように十分な時間を取れないセミナーでは、浄土や回向というテーマを一般概念として話すことに限界を感じた。英語でのプレゼンテーションの仕方を根本から考え直さねばならぬと思った。そこで、たとえば、『論註』の他力観——というようにテーマの範囲を絞ること。セミナーの発表者は、討論の材料をクラスに提供するのであるから、自分の浄土教への立場をもっと前面に出すこと。等々にもっと留意すべきだと考えた。

二月中旬から下旬にかけてのこの時期は、ウィスコシンの寒気がもつとも酷しいときで、屋外の気温は摂氏マイナス三十度ほどまで下がることがあった。大学へ出ない日は南極の越冬隊員のように一日部屋にじっとしていたが、窓の外に降りしきる雪をぼんやり眺めていると、気が滅入ってくるばかりであ

った。

三月一日 この日のセミナーは「念仏」がテーマであった。

宮下氏は、「念仏」の語源、思想の起源について、*anusati* という語『無量寿経』の念仏思想(称名・聞名・念仏・見仏・淨信・往生のプロセス)の確認を通して、浄土教の念仏思想を考えるための基本的視座を提示し、見解を明らかにした。

私は、コンセプトの範囲を絞ってやらねば先週の二の舞になると恐れたので、法然の念仏観を通して、念仏の思想にアプローチしてみようと思い、『一枚起請文』を取り上げることにした。『起請文』は、法然の念仏観を最も簡潔にかつ美しく表現しているが、その訳文、"The One-Sheet Document—Honen's *Paring Message*" を後根氏を通してコピーできたのは、私にとって幸いであった。

セミナーでは、まず『一枚起請文』の背景について説明し、そのあと学生のランディ・ウィルキンス氏に読んでもらった。私は、念仏の意味について、身・口・意の三業という観点からまとめてみた。すなわち口業の念仏で称名について、意業の信心で信仰について、身業の礼拝で念仏者の生きざまについて話してみた。

それから質疑に入った。当日は、シカゴ大よりポール・グリフィス教授が来訪した。仄聞するところ、氏は清田門下の逸材で阿毘達磨が専門とのことである。私は、クラスで同教授より、

なぜ他仏ではなく阿弥陀仏を念ずるのか。学問不要を説く『起請文』の思想と真宗学の立場に矛盾はないのか、などの質問をうけた。そのほかの学生から、念仏の呼吸法について、念仏と見仏について、キリスト教の称名との同異点について質問があった。セミナー後、ポール氏は、同様の宮下さんと話がはずんだようである。

『一枚起請文』の思想は、学生には比較的よく理解できたようであった。年輩の学生であるケン・マクラーノン氏は、念仏者の生き方に共鳴したようであったし、禪を長年やっている聴講生のジュリー・レディング(彼女はミルウォォーキーの某大学の人口学の教授と聞く)女史は、『起請文』に「美しい」と讃辞を惜しまなかった。

三月八日 当日は、浄土教における「信」がテーマであった。最初に宮下氏が、*śraddhā, prasāda* の概念について、また英語の *faith* と *belief* との関連について、梵本の『大經』に抛りながら、懇切に説明し、「仏法の大海は信をもって能入とす」(『大智度論』)という言葉で、プレゼンテーションを閉じた。この頃の氏は、口髭をたくわえ、いかにも気鋭の仏教学者という風貌であった。

私は、清田先生がご自分のペーパーで「信」について言及しておられる箇所、取り上げてみたい問題があった。それに關して私見を述べることにした。先生は、ペーパーで法蔵菩薩の問題に触れ、二つの解釈を紹介しておられた。第一は、平川彰博士の法蔵菩薩観であり、第二は、曾我量深氏の法蔵菩薩観で

あった。かつて伊東慧明・坂東性純両先生の英訳で、『Dharmakara Bodhisattva』(『イースタン・ブディスト』第一巻一号一九六五年所収)と題して、曾我先生の法蔵菩薩論がまとめられたが、これがフレデリック・フランク氏の手で再編集され、『The Buddha Eye』(Crossroad, 1982)に再録されている。清田先生がペーパーで引用したのは、この訳であった。

一方、平川先生には、「如来蔵としての法蔵菩薩」という論文があり、冒頭で曾我先生の〈法蔵菩薩は阿頼耶識なり〉という命題をフィロソフィカルな観点から批判されている。清田先生は、ペーパーのなかで平川説を支持し、曾我先生を批判しておられた。そこで私はこの日のテーマを「曾我量深の法蔵菩薩観」と題した。

私のプレゼンテーションの第一点は、〈法蔵阿頼耶〉説成立の歴史的背景の説明である。明治中期は個我の覚醒期であるが、清沢満之の「自己とは何ぞや」という自問も時代の問いと結びついている。そしてこれを承けた曾我量深の青年期の課題も自己(主体)の探求にあった。私は、「地上の救主」と「我等が久遠の宗教」という二つの初期の論文の一節を翻訳・紹介して、法蔵菩薩と阿頼耶識の探求が、共に「真実の我(主体)の探求と離れていないことに触れ、さらに『如来表現の範疇としての三心観』で〈法蔵阿頼耶〉説が成立していることに言及した。プレゼンテーションの第二点は、平川先生の批判の出発点になっているのが、フィロソフィカルな批判であったので、フィロソフィカルな誤りは、フィロソフィカルな誤りとは必ずしも言

えないのではないかという点である。私は、原始仏教で説かれた無我の思想が『涅槃経』で真我の思想において批判的に継承されていること、「義によって語によるな」と教説されていることに触れ、平川先生の批判が曾我説を根本的に否定し尽したものがどうか疑問を呈した。

このような主題をことさらに持ちだしても、ウィスコンシンの仏教学生諸氏には、遠い国の論争としてしか映らなかつたかも知れない。私の見解が清田先生の耳に正当な counterargument と聞こえたかどうかはともかく、言わんとする趣旨は大体ご了解いただけたようであった。

三月十五日　なんとなく日脚が長くなり、空は水色に澄んで春の気配が感じられた。キャンパスを歩いていたら、『Fresh air』と叫ぶ学生の声が聞えた。

セミナーは、この日から第二部 Indian and Chinese Canonical Sources に入った。

清田先生のペーパーでは、最初に『The Triple Sutra』とあって、浄土三部経、就中その成立史的な問題について論じられている。この論稿に関連して、宮下氏は、『初期大乘仏教の成立過程』(樽谷正雄著)を紹介する形で、大乘経典の成立過程のなかで浄土経典が占める位置について説明し、学生の大きな関心を呼んだ。

三部経のなかでは、『観経』と『阿弥陀経』は全文英訳があ

るが、『大経』は、マックス・ミュラーの梵本からの翻訳と英訳『真宗聖典』(アメリカ仏教会発行)に正依大経の部分訳が載っているにすぎない。

私は、三部経の成立史的な問題について論ずる力はないので、思想的な問題について扱ってみたいと思った。ただ、わずか一回か二回のセミナーで、浄土三部経の内容を概観するには、その思想を最も基本的な線に単純化して表現する必要がある。私は、浄土教の思想を「機法の対応」として把握する金子大榮先生の視点に倣うことにした。またこれ以後のセミナーでは、「機法の対応」という一点を視座に据えてプレゼンテーションを行うことに決めた。

『口伝鈔』によれば、『大経』は、法の真実を説く經典とされ、『観経』は、機の真実を説く經典とされ、『阿弥陀経』は、結経とされている。私は、この基本的な視点に立って、『大経』の法蔵菩薩の物語を「法のドラマ」(the drama of Dharmā)、すなわち南無阿弥陀仏の神話とし、『阿弥陀経』もそのなかに含めた。次に『観無量寿経』については、阿闍世と韋提希の物語を「業のドラマ」(the drama of Karma)として、『涅槃経』もそこに含めた。私は、「法のドラマ」と「業のドラマ」をチャートにして、浄土三部経の物語を概観してみることにした。三月十五日は、「法のドラマ」について述べて終った。三月二十二日は休日(一週間の春休み)で、三月二十九日のセミナーの前半に「業のドラマ」として、『観経』の韋提希と阿闍世の物語にふれた。

三部経の物語に最も深い関心を示したのはケン氏であった。彼は本業は政府の役人で、長年身障者の問題に従事してきたケース・ワーカーである。すでに心理学でM・Aを修得し、現在仏教学でPh・Dを取るべく大学院に在籍している。五十も半ばを過ぎていた。彼にとって『観経』への入口はユングの論文であったが、セミナーでは、とりわけ浄土教の人間観、就中「機」の概念に深い興味を示した。仏教研究にひととき実存的なアプローチをとる氏に、私は多くのことを教えられた。当初氏は唯識をドクター論文のテーマに予定していたが、やがて浄土教に変更された。

三月二十九日 セミナーの後半では、曇鸞の他力観を扱った『論註』の英訳は、一九七三年にウィスコンシン大に提出されたロジャー・コーレス氏の学位論文、"Tan huan's Commentary on the Pure Land Discourse: An Annotated Translation and Sociological Analysis of the Wang-shen lun-chu" に載った実験的な訳業が唯一ではないかと思う。

学生の間には、自力・他力という語は、浄土教の大切な概念として知られていた。山本晃紹氏の"Other Power"という英文の小著を読んだ人もいた。しかしこの本は、学問的なものではなく、曇鸞には殆んどふれていない。

わずかな時間で、しかも隔靴搔痒の感のつきまとう英語で、曇鸞大師の他力観の要諦を表現するのは難かしく思われた。

『論註』のなかで「他力」という語が出てくるのは、上巻の最初と下巻の最後だけなので、私はこの簡処を鈴木大拙訳『教

行信証』を参照して翻訳し、これを配布することにした。この『論註』からの引用によって、他力の概念を説明するために、

①菩薩の苦境 (human predicament)、②信仏の因縁 (karmic causation)、③仏力 (dynamic Buddha) と、三本の柱を立てた。

私は、当日のセミナーで、曇鸞の他力観は、仏道が本願力の加持によって始めて成就することを開顕したのだという一点を押えようとしたが、短かい時間であり、発表は練れていなかった。

セミナーのあと、清田先生からは、他力の真実は、人生の労苦を通さなければ自覚されないのではないか、との手厳しいご批判を頂戴し、宮下氏からは、ダイナミック・ブッダというのはいまにも唐突だと指摘された。

ただ学生のなかには、曇鸞の他力観を別な仏道体系に contextualize して理解してみようとする人もいた。私の human predicament, karmic causation, dynamic Buddha と、三つのカテゴリーを、ケンは、唯識の方面から、三性説の遍計所執性、依他起性、円成実性のカテゴリーにあてはめて考えたと述べた。またビルは、後日、自己の他力観について、原始仏教の無我説と関連させて、縷々所見を披瀝してくれた。

四月十二日 四月五日は休日 (Good Friday)。この頃には学生諸氏の気心もわかってきた。しかしセミナーに出るたび、私は真宗学の初心に引き戻される想いがした。このセミナーは他流試合ですよ、とは清田先生の常の仰せであったが、私は、まるで新米の少年剣士のように緊張しっぱなしであった。だからバイリンガルでベテランの先生が、自分もセミナーは緊張しま

す。どこから学生が打ち込んでくるか分らぬから、と剣道に喩えて話されたときは、何だかセミナーの部屋が道場のように思えてきた。先生はクラスでよく角砂糖や飴をなめておられたが、一種の精神安定剤だとのことであった。

四月十二日のセミナーは、清田先生のペーパーでは、「極悪人の救い」というテーマが取り上げられていた。これを補足する意味で、私は、二種深信と二河白道の喩を紹介することにした。

アメリカにおける善導研究の現状については寡聞にして私は知らないが、ジュリアン・パス氏が、“Shan-tao's Commentary on the Amitayur-Buddhanusmṛiti-sūtra” という論文で一九七三年にマクマスター大学で学位を取っている。またウィスコンシン大学では、羽田信生氏が善導を研究し、“The Development of the Concept of Prthagjana Culminating in Shan-tao's Pure Land Thought” で一九七九年に学位を取っている。

私は、浄土信仰の構造ということで、善導の二種深信に焦点をあててみた。浄土教の信仰は「機法の対応」という基本線に単純化すれば説明しやすいのではないかと思われた。私は、善導の人間観を「機の深信」の文を通して尋ね、至誠心の倫理的自覚が、「機の深信」の自力無効という宗教的自覚に展開するプロセスを話した。

あとの質疑応答でほとんど時間がなくなってしまう、二河白道の喩について説明することはできなくなった。私の経験では、二河白道の喩は、アメリカ人に浄土教の信仰的構造を理解して



もらうには、とても具体的な物語であると思う。今回は、スライドを使っただろうかと考えて、旧友のアラン・アンドリウス氏（ヴァーモント大）に依頼して、二河白道図のスライド・フィルムを送ってもらったが、活用する機会に恵まれなかった。

四月十九日 キャンパスが隣接するメンドータ湖の水がとけて

湖水が青々とひろがったのは去る三月二十七日であったが、もういきなり初夏に入ったような陽気であった。メモリアル・ユニオン（学生会館）一階のアイスクリーム屋の前には長蛇の列ができた。ウィスコンシンには春はないのではないかと思われた。この日から第三部の The Japanese Systemizations（日本における浄土教の大成）に入った。といつても、日本浄土教については、今回と来週の二回しか残されていないわけである。清田先生は、日本浄土教のパートにもっと時間をかけたかったと洩らしておられたが、もはやどうにもならなかった。

セミナーの当日は、法然浄土教について取り上げることになっていた。法然の書物の翻訳は、古い所では、コーツ・石塚共訳 “Honen the Buddhist Saint, His life and teaching” があり、また新しい所では、雑誌『ザ・ビュアー・ランド』に、近藤・モリス両氏の手で “Senchaku Hongan Nembutsu shu”（一九八三年六月）が訳載されている。近年、アンドリウス氏なども論文を発表している。

この日のセミナーでは、法然において、浄土教が浄土宗とし

て独立し、日本仏教が一大転回を遂げた意義について紹介することにした。そこで、第一に、法然にとってなぜ浄土門だったのか、第二に、法然は浄土への道をどのように歩んだか、というところについて考えてみたいと思った。いずれも浄土教のえらびの問題にかかわっているが、私は、『選択集』の聖浄二門判と総結三選の文をプレゼンテーションのレジメとした。

第一の、法然にとってなぜ浄土門だったのか——では、聖浄二門判に引用されている『安楽集』の一節に照らして、法然の捨聖帰浄の背景に時機の思想があることに注意し、法然教学が一種の危機神学であるという認識に立って、法然の危機意識について略述した。『安楽集』の危機思想に関しては、米國ではたとえばハワイ大学のデビッド・チャネル教授により “Early Forebodings of the Death of Buddhism” なる論文が書かれ、その鎌倉仏教に与えた影響が指摘されている。

第二の、法然は浄土への道をどう歩んだか——では、歴史的側面に言及すれば、問題の所在がいささか具体化できるであろうと考えて、平安仏教の複合性<sup>マルチフェイス</sup>と法然の専修念仏思想の果した役割についてふれた。その際、法然の選択思想を総括三選の文に照して説明した。

この日は、日本人在学生の後根定鑿氏が、浄土教を自分の研究課題としている関係で、いくつか有益な意見を出してくれた。彼とは、毎週日曜、私のいるアパートの一室で『般若三昧経』を一緒に勉強した。楽しい思い出である。

四月二十六日 この日のセミナーで、われわれ谷大陣の担当

するパートは終わった。記念写真を撮ったあと、まず宮下氏が、浄土の概念について、いわば縮めの意味で、再度プレゼンテーションを行った。仏教学の領域では、これまで浄土について、いくつかのトピックがあった。今想い出すところでは、たとえば、初期仏教の *durbha* と浄土教の *sukha* のタイ・アップをどう考えるか。Pure Land と *bhramaloka* にどういうリンクがあるか。Pure Land なる訳語は是非か。「福田」(*puṇya-ksetra*) との関連について。purified land と purified mind と Pure Land との関係はどうか。『八千頌般若』の浄土教的位置。こんなことが話題になったように記憶している。

真宗学の領域では、浄土の解釈および解釈史の問題がデイスカッションの俎上にのぼっていた。具体的に三経七祖の浄土観についての突っこんだ議論が展開したわけではないが、たとえば、三経の浄土観と『維摩経』などの「唯心的」浄土観との差異。浄土の本質は、フィジカルなものか、メタフィジカルなものか、メタフォリカルなものか。浄土建立の理由と目的。三経の「安養」や「極楽」に対して「浄土」なる語が疊贅以後歴史的に定着してきたのはなぜか。浄土と涅槃との関係。西洋の創造神話と『大経』の浄土神話の比較。……

宮下氏は、このようなさまざまなレベルをもった「浄土」のデイスカッションがもっとテキストの文脈に基いて行われるべきだとかねがね主張していた。氏の言われることは尤もであったと思う。この時点で、三経七祖の浄土観について一々テキストにあたるなどということは、もはや望むべくもなかったが、

その一端についてだけでもふれておく必要があった。蟻螂の斧にも似た行為であったが、私は、浄土観に関する六枚ほどの大雑把な見取図をつくってクラスに配ってみた。Something is better than nothing の気持からであった。浄土を人間成就の超越的根拠とし、これを現在の身に行証する親鸞のあのリアルな浄土観について、自分の言葉で語りうる力が欲しいものだと希われた。

筆端いささか傍路に及んだが、私は、清田先生の示唆もあり、セミナーの最後に、『教行信証』の四法の意味体系をざっと概観してみることにした。当日は、清田先生が、ご自分のペーパーで『教行信証』の組織について言及していることもあって、いくつかの質問をされた。

時間の関係上、私のプレゼンテーションは、ごく表面的に四法の意義をなぞるといった態のものに留まったが、私はクラスでの会話を通じて、親鸞の大方の概念の独自性に改めて眼を見張る思いがした。「大行」は、かの大拙師も翻訳にご苦労されたところである。名号の思想を西洋の論理でどう表現するか。これは真宗学の大きな課題である。その意味で、親鸞の教学を「言の教学」と領解して、近代人の言葉で語った安田理深師のお仕事は重要であると思った。

この日のセミナーは、三十分延長して五時半に終了した。

五月三日 セミナー最後の日は、学生のプレゼンテーション

であった。今回のセミナーのテーマに関連して、三人の学生が発表した。

(1) ジムニー・ハムード

‘The Buddhist Apocalypse: The Origins and Sociological Imperative of the *Mo-fa* Doctrine’

(2) ジム・ステッドマン

‘Pure Land Buddhism & the Buddhist Historical Tradition’

(3) ランディ・ウィルキンス

‘Tensions and Change in Jodo Shushu and a Preliminary Investigation of its Transplantation in North America’

この三人の発表の内容をここで紹介することはできないが、ただジム氏の発表にはいささか感ずるところがあったので一言コメントしておきたい。

ジム氏は、テラバード仏教を信奉する白人の学生である。かつてスリランカに渡り僧侶になったが、自分の使命は、アメリカにテラバードの思想を正しく伝えることであると自覚して帰国し、目下この大学院でテラバード仏教を西洋哲学の文脈で再考すべく研究している。清田先生によれば、アメリカの仏教研究者には二つのタイプがあるという。第一は、仏教を合理的体系として扱えようとするもので、第二は、仏教を純粹に実存主義として扱えようとするものである。(参照: *‘Mahayana Buddhist Meditation’* Introduction) この清田先生のカテゴリーにしたが

うなら、ジムは、前者に属するタイプの学生である。

セミナーの間、テラバード仏教を仏教のオーソドックスと信ずるジム氏は、それ以外の仏教、浄土教に対して極めて批判的であった。彼の純粋な性格は好ましいものであったが、そのあまりにもセクタリアンな彼の仏教観から、他の学生の猛反発を受けたことが少なくなかった。

この日の発表も、もっぱら彼の尊敬するデビッド・カルバーハナ博士(ハワイ大)の所説に則って、論理学の方法をとりつつ浄土教を批判したものであった。その方法をとやかく言うのではないが、私が気になったのは、ジムのテーマ ‘Buddhist Historical Tradition’ (仏教的伝統) についてである。一体、仏教的伝統とは何であろうか。

西洋的仏教史観を典型的に示すのは、ジム氏のように、原始仏教(テラバードを含めて)こそ根本仏教であるという考え方である。この考え方でゆくと、インド仏教が中国に入って変質し、さらに日本に入って変質したということになる。すなわち、インド仏教の大河が、中国に入って分流し、日本に入ってさらに細くなった、あるいは、インド仏教が中国に入って中身が薄くなり、さらに日本で薄まった、という考え方である。ウィスコンシンの仏教学生の間では、ジム氏は例外的であった。が、西洋的仏教史観の多くはこの考え方に立っている。

これは、仏教的伝統の原点を原始仏教にみてゆく立場である。しかしこういう見方と対照的なのが親鸞の仏教史観である。仏教の歴史を念仏流伝の歴史とみる親鸞は、インドで明らかにな

らなかつた念仏の教えが、中国で明らかになり、さらに日本の法然に至って一層明らかになったという考え方に立っている。

(参照、曾我量深『親鸞の仏教史観』)

仏教的伝統とは何か？ 親鸞の仏教史観は、西洋的仏教史観と対照的である。私は、ジム氏の発表を聞きながら、仏教的伝統における解釈学的規準(hermeneutical criterion)のもつ意味について、しきりに考えさせられた。

——かくして、厳しい冬に始まったウィスコンシン・セミナーは、リンゴの木々が可憐な花をつける頃、一応その幕を閉じたのである。

記すべきことの何分の一も記していないが、限られた紙数も超過してしまった。ひとまずここで拙文を閉じたい。以上のメモ的な文章を書き連ねながら、先生はじめ多くの学友の顔がふたたび私の脳裏に浮かびあがり、様々な感慨が交錯した。愉快な思い出とともに、私が直面した甘くない現実のあれこれの記憶が、古い傷口が疼くように蘇ってきた。しかしあの半年のあいだ私を導いて下さった方々、清田先生、同僚の宮下先生、後根さん、ビルさんなど多くの方々への感謝の気持を忘れてはな

らぬと私は自分に言い聞かせている。とりわけ清田先生ご夫妻から賜わったご芳情は決して私が忘れてはならぬものである。

セミナーでの先生の有益なご教示は申し上げるまでもないが、生活面ではご夫妻に随分心配をおかけした。ノー・カー、ノー・ワイフというむさ苦しい単身赴任者である私も、数々のお心配りを受けて、不慣れな外国生活をどうやら乗り切ることができた。

先生は、ぐうたらなこの中年男が少しでも規則正しく健康に毎日の生活を送れるようにと、毎週二回剣道の手ほどきまでして下さった。まさかウィスコンシンで半年間竹刀を振る破目になろうとは、つゆ思わなかった。私は何と日本に防具まで発注したのである。(詳細を述べるのは控えるが、UW-Madison Kenzo Clubで得た教訓、若い人たちの友情は生涯忘れえぬ思い出として深く心に残るであろう。)はるか京都から清田先生ご夫妻のご清祥を念じつつ筆を擱く。

なお今回の北米体験の総括として、私は、さきに『研究所報』No. 14(大谷大学真宗総合研究所発行)に「アメリカにおける真宗宗の動向」と題する報告を載せた。併せてお読みいただけるならば幸いである。